# [研究ノート]

# 『不思議の国のアリス』の翻訳を ジェンダーの視点から考察する

--- 人称代名詞と会話文を中心に ---

夏目 康子

#### 要旨

Alice's Adventures in Wonderland の明治から平成時代の翻訳作品を、ジェンダーの視点から分析する。特に、人称代名詞、女ことば・男ことば、会話文に着目して訳語を比較検討し、訳者や時代による翻訳の違いについて考察する。

#### キーワード

『不思議の国のアリス』、翻訳、ジェンダー、人称代名詞、女ことば

# 1. Alice's Adventures in Wonderland の翻訳の歴史

Lewis Carroll の Alice's Adventures in Wonderland (1865) は、ヴィクトリア 朝時代のイギリスで出版されたが、当時の子どもの読み物に多い道徳臭、教 訓色、宗教色がない点が新鮮であり、替え歌、なぞなぞ、トランプなど子ど もの遊びの要素が織り込まれ、多くの子ども読者を獲得した。この作品は、高度な言葉遊び、ノンセンス性、風刺、論理学的謎かけなど、大人も惹きつける要素も備えていた。

日本では、部分訳は明治41年(1908年)の永代静雄による『不思議の国のアリス』が、全訳は明治43年の丸山英観の『愛ちやんの夢物語』が最初である。丸山訳では主人公の Alice が愛ちやん、猫の Dinah が玉というように、多くのものが日本的なものに置き換えられた。その後、明治、大正時代に、丹羽五郎、楠山正雄、望月幸三、鷲尾知治、益本青小鳥、大戸喜一郎らの翻訳

が続く。昭和2年に菊池寛と芥川龍之介共訳の『アリス物語』、昭和4年に岩崎民平の研究社英文注叢書『不思議國のアリス』が出版され、その後の翻訳に大きな影響を与えた。太平洋戦争が始まると翻訳や出版文化は下火となり、『アリス』の翻訳が続々と出版されるのは1970年代以降である。

昭和後期には日常語を使って訳した芹生一による『ふしぎの国のアリス』 (1979) や、石川澄子による Martin Gardner の The Annotated Alice の邦訳『不思議の国のアリス』 (1980) が出版された。石川訳は淡々とした「ですます」調である。ジェイムズ・ジョイスの翻訳も行う柳瀬尚紀は一般向け(1987)と子ども向け(1990)の2種類の『不思議の国のアリス』を出した。英語の言葉遊びの和訳に独自の工夫がある。北村太郎の『ふしぎの国のアリス』 (1987) は口語調を駆使した軽妙な訳である。矢川澄子の『不思議の国のアリス』 (1987) は口語調で生き生きとしたアリス像を描いた。ウェブ上に翻訳を公開した山形浩生の『不思議の国のアリス』 (2003) は、それを書籍化したものである。河合祥一郎は『不思議の国のアリス』 (2010) で、詩の訳を日本語でも押韻させ、工夫を凝らした。英文学者の高山宏は、Martin Gardnerの『アリス』の詳細な注釈書 (1990、2015)を複数翻訳 (1994、2019) したが、本稿では『不思議の国のアリス』 (2015)を取り上げる。英語学者である安井泉は、対訳注釈本である『不思議の国のアリス』 (2017)を出した。

他にも『アリス』には多くの翻訳が出版され、訳者は芥川龍之介、菊池寛、 三島由紀夫などの作家、矢川澄子や北村太郎などの詩人、翻訳専門家、英文 学・英語学研究者、翻訳のプロではないが独自の翻訳を試みる者など多様で ある。『アリス』は様々な人を翻訳へと惹きつける。

楠本君恵は『翻訳の国の「アリス」』(2001)で、1994年の段階で『アリス』は137の言語で翻訳されており、日本には『不思議の国のアリス』と『鏡の国アリス』のおびただしい翻訳書があることを指摘している(4-7)。一方、千森幹子は『表象のアリス』(2015)で、英文から日本語に翻訳する際翻訳者が直面する問題として、日本語特有の曖昧さや婉曲表現があることなどを挙げ、特に会話の翻訳が難しいことを指摘している(115-18)。確かに会話の翻訳は難しいが、それゆえ各訳者が工夫をこらし、個性が表れる所であるので、本稿では、会話文の訳を中心に検証する。日本語は漢字、平仮名、カタ

カナと文字が多様であり、それを活用し翻訳に生かすことができる<sup>1)</sup>。本稿では、人称代名詞、女ことば・男ことば、会話文に着目してジェンダーの視点から訳語を比較検討し、時代による翻訳の違いについて考察する。

## 2. 人称代名詞の訳

まず、会話文における人称代名詞の訳語を検討する。アリスの会話文の"I"の明治から平成の訳を調べると「わたし、あたし、私、わたくし」がある $^2$ )。一方、男性登場人物の場合、例えば、第6章のアリスとチェシャ猫が対話する場面では、チェシャ猫の"I"には「私、わたし、僕、ぼく、おれ、わし、おいら」と7種類の訳がある。他に日本語には"I"の訳として「あたし、あたくし、わたくし、おら、うち、吾輩」などがあるので、それも含めれば"I"の訳語には10種類以上あることになる。次は、第6章でアリスに対してチェシャ猫が言う"we're all mad here. I'm mad. You're mad." (57) の"I"の訳を分類したものである。

#### 1)私

『自分達だって皆な斯うして居たつて狂人なんだ。<u>私</u>も狂人。<u>お前</u>も狂人』(丸山 1910、下線筆者、以下同)<sup>3)</sup>

『此處ぢやァ、誰だつて気狂ぢやありませんか。 $\underline{\Lambda}$ だつて。貴嬢だつて』 (丹羽 1911)

『皆んなきちがひじあないか、 $\underline{\Lambda}$ もきちがひだし、 $\underline{\lambda}$ 前さん</u>もきちがひじあないか』(望月 1923)

『みんな、気ちがひなんだからね。 $\underline{\Lambda}$ も気ちがひ、 $\underline{\lambda}$ お前さん $\underline{\Lambda}$ も気ちがひさ』(大戸 1926)

#### 2) わたし

「ここにいる人たちはみんな気ちがいなんだからな。<u>わたし</u>も気ちがい。 おまえさんも気ちがい|(田中 1955)

#### 日本語とジェンダー 第19号 (2021)

「ここじゃみんな気が狂ってるんだ。 $\underline{b}$ たしも気ちがい、 $\underline{b}$ んたも気ちがい」(高橋 1985)

「ここじゃ、みな気がふれてる。わたしもだ。あんたもだ」(高山 2015)

#### 3) おれ

「ここに住んでいるものはみんな気ちがいなんだから。<u>おれ</u>も気ちがいだし、あんたも気ちがいさ」(福島 1975)

「ここじゃ、みんな狂っているんだ。<u></u> <u>まれ</u>も狂っている。<math><u></u> <u>あんた</u>も狂っている」(柳瀬 1987)

「ここにいるものはなあ、みんな頭がおかしいんだからなあ。<u>おれ</u>は気ちがい、おまえさんも気ちがいだべえ」(北村 1987)

「このへんじゃ、だれでも狂ってるんだ。<u></u> <u>まれ</u>も狂ってるし、<math><u></u> <u>あんた</u>も狂ってる」(矢川 1990)

「ここじゃあ、みんな気がくるってるんだ。 $\underline{snt}$  くるっている。 $\underline{z}$  もくるっている」(河合 2010)

「ここじゃ、だれでも、くるってるんだから。 $\underline{sh}$ も、 $\underline{sh}$ も、 $\underline{sh}$ も、くるってる $\underline{sh}$ (大西 2015)

## 4)僕

「ここでは皆気違いだからな。<u>僕</u>も気違い。<u>おまえさん</u>も気違い」(岩崎 1929)

#### 5) ぼく

「ここじゃ、みんな気がへんなんだから。 $\underline{\it isc}$ もへんだし、 $\underline{\it a}$ だってへん さ」(脇 2000)

「ここらじゃみんなキチガイだもん。 $\underline{\textit{isc}}$ もキチガイ、 $\underline{\textit{bhc}}$ もキチガイ」(山形 2003)

## 6) わし

「ここではみんな気違いなんだからね。<u>わし</u>も気違い、<u>あんた</u>も気違いだ よ」(多田 1975)

#### 7) おいら

「ここにいる連中はみんなが変だからな。<u>おいら</u>も変だ。<u>おまえさん</u>も変だ」(安井 2017)

人称代名詞の訳により、話す人物の想定される年齢や雰囲気が大きく変わる。明治、大正時代はチェシャ猫の"I"は「私」と訳されている。漢字が多用されるが、必ずルビが振られ、読み方が明示される。昭和になると平仮名の「わたし」が登場し、平成でも使われる。だが、昭和、平成で最も多いのは「おれ」である。「私」よりも野性味のある「おれ」が増える。同時に、もう少し洗練された、あるいは少年らしい「僕、ぼく」も登場する。少ない例だが個性的な「わし」「おいら」もある。推測される年齢層は「僕、ぼく」は少年・青年、「おれ」は青年・成人、「私、わたし」は成人、「わし」は中年・老年、「おいら」は年齢不詳だろう。本文ではチェシャ猫の年齢は明記されていないので、人称詞が読者に与える印象は大きい。

次に、チェシャ猫がアリスを指す "you" の訳では、チェシャ猫が自分を「私、わたし、おれ、僕、わし」と呼ぶ場合、アリスのことを「あんた」か「おまえさん」と呼ぶ。しかし、チェシャ猫が自分を「ぼく」「おれ」と呼ぶ時、アリスを「君」と呼ぶことがある。明治と昭和初期にアリスを「お前、おまえ」と呼ぶことがあるが、昭和後期は見られない。「お前」は、現代では相手を見下した印象を与えるからだろう。これは特殊な例だが、丹羽はチェシャ猫を雌猫とみなし、始終女言葉を語らせる。原文ではチェシャ猫を指す代名詞は "it" だが、作品では Queen of Hearts が "Off with his head!"(75、下線筆者)と言う場面があるので雄猫と考えられる。しかし、丹羽はチェシャ猫を「化猫」や「黒猫」とし、独自の解釈を織り込み 4)、猫に自分を「私」、アリスを「貴嬢」と呼ばせ、女学生同士のような丁寧な会話をさせている。話し手と話し相手との関係については、本稿第5章でも検討する。

# 3. 女ことば、男ことば

本章では、翻訳における女ことば、男ことばについて検討する。英語には 日本語ほどジェンダーによることばの差はないが、英語で女性が多く使う表 現には "Oh, my dear!"、"Oh, my goodness"、"Lovely!" などがあり、また cute, sweet, pretty, awfully, so, kind of などを多用する傾向がある。例えば "Oh dear! What a pretty cat, isn't it?" の様な言い方は女性に多い。しかし日本語に比べて男女ことばの区別は曖昧である。

それに対して、日本語は語尾によって女ことばか男ことばかが区別しやすい。例えば文末詞の「だわ、なのよ、かしら、まあ、あら」は女ことばだが、「だぜ、だな」は男ことばだ。しかし現代では日常生活で実際に「だわ」を多用する女性や「だぜ」を多用する男性は多くはない。現代日本では男女ことばの区別は薄れ、曖昧である。中村桃子は、翻訳には日本人女性が使わないような典型的な女ことばが使われることが多いと指摘する(9)。中村は「ぼく、きみ」などは江戸末期に教養層に広まった語法で、明治時代「書生言葉」として認知されたものであり(88-89)、また明治12年頃女子学生が使い始めた「てよ、だわ」という文末詞を含む言葉が、西洋文学の翻訳の若い娘の言葉に使われ、西洋・近代のイメージと女子学生が近づき、やがてセクシュアリティと結びついた「女学生ことば」に変換された経緯を考察している(第4章)。

次に、女ことばに着目し、第1章のアリスの独り言 "Well! ... How brave they'll all think me at home! Why, I wouldn't say anything about it, even if I fell off the top of the house!" (10) の訳を時代順に検討する。

- 1) 『よし、……家に居る皆がどの位私を大膽だと思ふでせう!さうだ、こんな事何も話すまい、縦令屋根の上から落ちても!』(丸山 1910)
- 2)『私もう二階から落ちちやァ大變だなんて<u>思はないわ</u>。家根の天邊から落ちたつて大丈夫だわ』(丹羽 1911)
- 3)「家の人たちはあたしがどんなに強いと思うでせう。こんな具合では屋根の天邊から落ちたつてあたし何にも言ひはしないから」(楠山 1920)
- 4) 『<u>宜いわ</u>。……家の人等は皆どんなに私が勇気があつて、偉い者だと思ふだらう……何故つて、私は屋根の頂上から落ちたつて、こんなだつたら……平気でゐられるんだもの』(益本 1925)
- 5)『まあ、……家の人が、私をどんなに強いと思ふでせうね。屋根から落ち

たつて何とも言ひはしないわ』(大戸1926)

- 6) 「<u>まあ</u>。……さうするとうちの人なんか、わたしをずるぶん強いと思<u>ふことでせうねえ</u>。まあ、わたし屋根の頂邊から落ちたつて何にも言や<u>しな</u>いわ」(菊池 1927)
- 7)「さて……うちでは皆私の勇気に驚くに<u>違いないわ</u>。なあに、屋根のてっぺんから落っこちたって黙っていてやるわ!|(岩崎 1929)
- 8) 「さて……家の人たちはみんな、わたしのことをなんて勇ましい子だろうと<u>思うわ</u>! <u>そうよ</u>! わたし、家のてっぺんから落っこちたって<u>黙ってて</u>やるわ!」(多田 1975)
- 9)「<u>そうよね</u>……うちじゃ、みんな、あたしのことを、とってもきつい子だって<u>びっくりするわ</u>。そうですとも、屋根のてっぺんから落っこちたって、泣きごとなんかいうもんですか」(芹生 1979)
- 10)「やれやれ!……もう<u>へっちゃらだわ</u>!うちの人たちはみんな、まあなん て気丈な子だと思うだろう。もちろん、わたしはうちの屋根から落ちたって、それっぱかしのことで騒ぎたてやしない!」(石川 1980)
- 11) 「<u>ほんとうよ</u>! ……うちの人はみんなわたしのことをなんて勇敢なんだろうと<u>思うわ</u>! たとえ屋根のてっぺんから落ちたって、わたしきっとなにもいわないわ! ( 高橋 1985)
- 12) 「<u>ほんとよ</u>!……おうちへ帰ったら、みんなであたしのこと、すごく勇気があるって<u>思うわ</u>!ええ、お屋根の天辺から落っこちたって、あたし絶対なんにもいわないから!」(柳瀬 1987)
- 13) 「そうだっ! ……うちの人たちはみんな、あたしのこと、えらいっていうだろうな! うふっ、このぶんじゃ屋根から落ちたって、あたし、一言も言わないよ」(北村 1987)
- 14) 「 $\underline{\text{NND}}$ 、……帰ったらみんなが、なんてえらい子って思うだろうな。<u>そうよ</u>、屋根のてっぺんからおっこちたって、声ひとつたてやしないから」 (矢川 1990)
- 15) 「おうちじゃみんな、あたしがすごく勇敢だと思うで<u>しょうね</u>!ええ、おうちのてっぺんから落っこちたって、もう一言も文句を言<u>わないはずよ</u>」 (山形 2003)

- 16) 「うわあ!……おうちに帰ったら、みんな、わたしのこと、なんて強い子だって感心してくれるん<u>じゃないかしら</u>! 屋根のてっぺんから落ちたって、わたし、何も言わないわ!」(河合 2010)
- 17) 「<u>そうよ</u>……家じゃみんなに思われるにちがいない。<u>そうよ</u>、家のてっぺんから落ちたって、わたしなあんにも言わない|(高山 2015)
- 18) 「<u>そうよ</u>。<u>そうだわ</u>!……うちのみんなはきっと、まあなんて勇敢な娘なのって<u>びっくりするわ</u>!<u>そうね</u>、屋根の上から落ちたって、きっと『痛い』なんて言わないわ!」(安井 2017)

主人公アリスのモデルは、作者 Lewis Carroll が数学講師をしていた Oxford 大学 Christ Church 学寮長 Henry Liddell の娘 Alice Liddell であり、上層中産 階級に属している。作品中、アリスはアイデンティティが揺らぎ、自分はお もちゃもなく、狭苦しい家に住むメイベルなのではと疑い、階級差を意識する場面がある(19)。

明治時代のアリスの会話文は、階級に相応しい丁寧な言葉遣いである。丹 羽訳のアリスは、ヴィクトリア朝上層中産階級の少女が話す言葉として「だ わ」などの女学生ことばを話している<sup>5)</sup>。大正時代の益本、大戸訳、昭和初 期の菊池、岩崎訳も女学生ことばを使う。昭和後期には、石川訳のアリスは 「かしら、わ」という話し方もするが、「やれやれ、だろう、しない」という 淡々とした話し方もする。矢川訳でも「いいわ、そうよ」という女ことばと ともに、「だろうな、しないから」などジェンダーにとらわれない話し方もす る。高山訳も「そうよ」という女ことばと、「ちがいない、言わない」を併用 している。北村訳のアリスは「そうだっ、いうだろうな、言わないよ」など ジェンダーにとらわれない話し方である。北村は、日本の童話の翻訳文体は 「子どもことばの文語体」が多すぎたが、自分は「子どもことばの口語体」に 関心があると述べる(232) 6)。ここでいう文語体には女学生ことばも含むだ ろう。北村の訳語は現代の少女の言葉遣いを反映している。それに対して高 橋訳の「思うわ、いわないわ」、河合訳の「ないかしら、言わないわ」、安井 訳の「そうよ。そうだわ!言わないわ!」は女学生ことばである。このよう に、詩人の訳では女学生ことばを避け、英文学・英語学者の訳では女学生こ

とばを多用する傾向がある。

ジェンダーの視点からすると、女ことばを始終話すアリス(第一のアリス) と、ジェンダーにとらわれない言葉遣いのアリス(第二のアリス)と、双方 の言葉遣いを往来するアリス(第三のアリス)がいる。第三のアリスは、新 しいジェンダー観と古いジェンダー観の間で揺らぐ現代少女のようである。

次に、感嘆詞を検討する。会話冒頭の感嘆詞"Well!"の訳語は、「よし、宜いわ、まあ、さて、そうよね、やれやれ! ほんとうよ!ほんとよ、いいわ、そうだっ!うわあ!そうよ」という具合に、多様だ。昭和以降の方が元気な印象を与え、感嘆符「!」の使用が増えるのも昭和以降である。

明治から平成の訳をたどると、表記は漢字から平仮名へ変わり、言葉遣いは丁寧な言葉から口語調に変わり、語彙も「縦令屋根の上」「屋根の頂上」から「屋根のてっぺん」へ、「何も話すまい」から「なんにもいわないから」「一言も言わないよ」へと、くだけていく。明治の翻訳は階級を意識した中上流階級風の丁寧な言葉遣いであり、女学生ことばも使う。大正も同様だが、昭和になると1980年の石川訳あたりからジェンダーにとらわれない言葉遣いが見られ、北村、矢川訳も同様である。一方で、高橋、柳瀬、山形、河合、安井訳には女ことばが多用される。また高山、矢川訳には、女ことばとジェンダーフリーの言葉が併存する。北村、矢川など自ら創作も行う文学者の方が、新たなアリス像を生み出そうとしているのがわかる。高橋、柳瀬、河合、安井など英文学者、英語学学者のアリス像は、反対に、従来のジェンダー観の範囲内にとどまっている。英文学者の高山の訳は、その中間に位置している。以上の様に、訳者により、登場人物の会話文に込めるジェンダーの意識が異なるが、ジェンダーにとらわれない新たな人物像が生み出されているのは、学者よりも、文学者の翻訳の方が多い。

# 4. Cheshire Cat と Alice の会話文

本章では第6章のチェシャ猫とアリスの会話文を検討する。人称代名詞の 訳し方、語尾、どのようなキャラクター像が提示されているかに着目して比 較を行う。次が原文である。

- "Would you tell me, please, which way I ought to go from here?"
- "That depends a good deal on where you want to get to," said the Cat.
- "I don't much care where---" said Alice.
- "Then it doesn't matter which way you go," said the Cat. (56)
- 1) 『教えて頂戴な、ね、<u>私</u>は此處から何方へ行けば<u>可いの</u>?』『それは云ふまでもなく、<u>お前</u>の往くところに<u>依るさ</u>』と猫が云ひました。『所處へでも<u>關やしないわ</u> 』と愛ちゃんが云ひました。『それなら何方の道へ行ったって關やしない』と猫が云ひました。(丸山 1910) $^{7}$
- 2) 『私、是から何處へ行つたら<u>良くつて</u>』綾子さんは思い起こしたやうに、かう訊ねました。すると黒猫が、『どつちへでも<u>御勝手次第よ</u>』『私最早何處かへ<u>行きたいわねェ</u>』『貴嬢、徒歩いて行けば<u>良いわ</u>。何處へでも<u>行かれてよ</u>』(丹羽 1911)
- 3)「失禮ですが、こゝから行くには、どの道を通って行けばいゝでせうか」 「それは<u>お前さん</u>の行きたい先次第だよ」と猫はいひました。「<u>あたし</u>ど こでもいゝんですけれど——」とアリスはいひました。「ぢやあどっちへ 行つたつていゝぢやないか」と猫はいひました。(楠山 1920)
- 4) 『こゝからどつちの方へ行つたらいゝのか<u>教えて頂戴な</u>』 『<u>お前さん</u>の行きたい所にもよるがねえ』と猫が云ひました。 『どこでもいゝんですけど—— 』とアリスが云ひました。 『じあどこへでもお行きよ』と猫が云ひました。 (望月 1923)
- 5)「金目の黒ねこさん。ここからどつちへ行ったらいゝのかをしへてちやうだい」「<u>おまえ</u>の行きたいところにもよるがね」「どこでも<u>いいのよ</u>」「じゃどこへでもお行きよ」(鷲尾 1925)
- 6) 『<u>私</u>はどつちへ行けば良いのですか?教へて<u>下さいな</u>』 『どこへ行きたいと先に云はなくちや……』と猫は云ひました。 『<u>私</u>は何處だって<u>かもやしないわ</u>……』とアリスが云ひました。 『ぢや、どつちへ歩いたつて好いぢゃないか!』と猫は云ひました。 (益本 1925)
- 7) 『あの、失禮ですけど』とアリスは言いました。『こゝからは、どちらへ歩いて行ったらよろしいのでせう』 『そりやおまえさんの行きたいと思ふ

- ところによってちがふね』と猫はいひました。『どこでもいゝんですが』とアリスはいひました。『それなら、どう歩かうと構ったことぢやないね』と、猫はいひました。(大戸 1926)
- 8)「濟みませんが、こゝから行くにはどの道を行けばよろしいんでせう」「それは、<u>お前さん</u>の行きたいと思って居るところできまるよ」と猫はいひました。「<u>わたし</u>どこでもかまはないのです」とアリスは言ひました。「それぢやどつちを行つても構はないさ」と猫が言ひました。(菊池 1927)
- 9)「失礼ですが、<u>私</u>はここからどちらへまいりましたらいいでしょうか?」「それは行きたい所しだいさ」と猫が申しました。「<u>私</u>は別にどこへも —」とアリスが申しました。「では、どちらへ行っても<u>かまわんさ</u>」(岩崎 1929)
- 10) 「おたずねしますが、ここからどちらへ行ったらよろしいのでしょう?」 「そいつは大いに行きたいところ次第だよ」と猫は言いました。「<u>わたし</u>、 どこと言って格別には——」とアリスは言いました。「それじゃ、どっち にいったってかまわんよ」(多田 1975)
- 11) 「これからどっちの方にいったらいいのか、教えていただけません?」「それは<u>おまえさん</u>の行きたいところしだいさ」「<u>あたし</u>、べつにどこでなくちゃということも 」「それならどっちへいこうとかまわない」(芹生 1979)
- 12) 「ちょっと伺いますが、ここからどっちへ行ったらいいのでしょう」「ど こへいきたいのか、いきたいところ次第<u>です</u>」と猫はいいました。「ど こって別に——」「そんなら、どっちへいっても同じです」(石川 1980)
- 13) 「あのう、教えてください、<u>あたし</u>ここからどっちへいったらいいんですか?」「<u>きみ</u>がどこへいきたいかに<u>よるね</u>」猫はいった。「どこでもかまわないんですけど 」アリスはいった。「それならどっちへいってもかまわないだろ」(柳瀬 1987)
- 14) 「ねえ、ネコちゃん、 $\underline{a}$  たし、どっちへいったらいいのか、教えてくれない?」「そりゃあなあ、 $\underline{s}$  まえさんがなあ、どっちへ行きたいかで決まる<u>べえ</u>」とネコは答えた。「どっちでもいいのよ、ただ 」「それじゃあなあ、どっちへ行こうとなあ、関係ないべえ」(北村 1987)

- 15) 「あのう、<u>わたくし</u>、ここからどの道を行けばいいか、教えていただきたいんですけど」「そりゃ、<u>あんた</u>がどこへ行きたいかに<u>よるわな</u>」とネコのこたえだ。「どこだっていいんですけど――」「そんなら、どの道だってかまわんだろ」(矢川 1990)
- 16) 「お願い、教えてちょうだい、<u>あたし</u>はここからどっちへいったらいいのかしら」「そりゃかなりのところ、<u>あんた</u>がどこへいきたいかによるなあ」とねこ。「どこでもいいんですけど」とアリス。「ならどっちへいっても関係ないじゃん」(山形 2003)
- 17) 「おそれいりますが、教えていただけますか?<u>私</u>、ここからどっちへ行けばいいのかしら?」「そりゃあ、<u>あんた</u>がどこへ行きたいかによるわな」と猫は言った。「別に、それほどこだわりはないの——」言いかけたアリスに、「ほんじゃ、どっちへ行ったって<u>かまわねえだろうがよ</u>」(村上 2006)
- 18) 「どうか、教えていただけないでしょうか、ここからどちらのほうへ行ったらよろしいでしょう?」「それは<u>君</u>がどこに行きたいかに<u>よるね</u>」ネコは言いました。「どこでもいいのですが——」アリスは言いました。「じゃあ、どっちに行ったっていい」(河合 2010)
- 19) 「ここからどっちへ行くのがいいか、教えていただけませんか」と言いました。「<u>あんた</u>がどこに行きたいかで決まる」と猫。「どこに、って別に—」とアリス。「じゃあどっちへ行こうと勝手さ」(高山 2015)
- 20) 「ねえ、教えて下さらない。 $\underline{h t \, L}$  はここからどっちに行くのがいいのかしら」「そりゃあ、もっぱら<u>おまえさん</u>がどこへ行きたいかによるね」「どこへ行くのでもいいわ—」「だったら、どっちに行ったところで、たいした違いはない」(安井 2017)

アリスの "Would you tell me, please…?" はかなり丁寧な依頼の言葉だが、鷲尾訳「をしへてちやうだい」、北村訳「ねえ、教えてくれない?」にはあまり丁寧さがない。一方、「失礼ですが」「濟みませんが」「おたずねしますが」「おそれいりますが」で始まる訳は丁寧で原文を尊重しているが、7歳の少女が話す言葉としては大人びていて奇妙に映る。大正時代の訳では、楠本、大戸

訳のアリスは大人の様な口調、望月、鷲尾訳のアリスは子どもらしい口調という具合に、同じ時代でも傾向が分かれる。

チェシャ猫がアリスを指す二人称の "you" は、明治、大正、昭和初期は「お前、おまえ、お前さん、おまえさん」と訳されている。丹羽訳ではチェシャ猫が雌猫なので、丁寧な「貴譲」と訳される。また、益本、岩崎のように "you" をあえて訳さない場合もある。昭和の戦後は、「おまえさん、あんた、君、きみ」と訳され、多田、石川のようにあえて訳さない場合もある。戦前にあった「おまえ」という訳語は、戦後は見られない。代わりに「あんた、君、きみ」が登場する。第二次世界大戦を挟んで、訳語は変化している。表記の変化だけでなく、より話し言葉を生かした訳へと変わっている。アリスが自分を指す "I" は「私、わたし、わたくし、あたし」である。明治時代は漢字の「私」が多く、大正に平仮名の「あたし」が登場するが、戦後は平仮名の「わたし、あたし」が多い。

次に、会話文の文末詞を検討する。文末詞にはジェンダー差が表れやすい。 アリスの会話の中の文末詞を挙げると「の? わ、よ、な、けど、かしら」が ある。チェシャ猫の方は「さ、だよ、ねえ、ね、さ、です、だろ、べえ、わ な、じゃん、がよ」など多様だ。文末詞によって、話し手のキャラクターや、 会話のニュアンスが変わる。

以上の様に、チェシャ猫が自分を指す"I"とアリスを指す"you"の訳、および、会話の語尾により、キャラクター像が変化する。典型的な女学生ことばを話す丹羽訳、ですます調の石川訳、方言を使う北村訳、こだわらない口調の矢川訳、若者言葉「じゃん」を使う山形訳、方言を使った朴訥な村上訳、冷静な語り口の河合訳、突き放した話し方の高山訳、理詰めの安井訳など様々である。同じ原文であり、同じチェシャ猫なのに、これほど雰囲気が異なる。代名詞の選択と、語尾の使い方は、キャラクターの設定に大きな影響を及ぼす。このように、会話文には、どのような人物像を提示したいのかという訳者の意図と同時に、訳者自身が、詩人や作家などの創作者なのか、それとも研究者なのかという自身の特性も反映される傾向がある。ジェンダーにとらわれない話し方をするアリスは、訳者によって、提示される人物像が異なり、それぞれ個性的である。言葉遣いのうえで、アリス像と同様、チェシャ猫の

場合も、英文学者ら研究者らの訳よりも、北村や矢川など文学者の訳の方が、より独自の個性的なキャラクター像を描き出しているのが興味深い。

## 5. 翻訳に表れるもの

会話文において、人称代名詞、特に一人称の"I"と二人称の"you"の訳語は、話し手の人物像を形成すると同時に、話し手と話し相手との関係も示唆する。「わたし」と「あなた」にするのか、「ぼく」と「きみ」にするのか、「おれ」と「おまえ」にするのか、組み合わせは多数あるが、相互の関係性が示される。灰島かりは、代名詞の中でも、特に二人称の訳は難しく、訳すときに省略されることも多いと述べている(49)。それだけに、あえて訳す場合、一人称と二人称の訳語には訳者のポリシーが表れる。

さらに、会話文の語尾も人物像の形成に影響を与える。翻訳では、英語よりも多様な日本語の特質を認識して訳語を選択する必要がある。前章の具体例で見たように、文末詞で語尾のニュアンスが変わり、また、一つの"I"に10以上の選択肢がある日本語への翻訳は、特に会話文の場合、それだけ訳者の自由度が高く、同時に訳者としてのセンスと力量が示される。また、分析してみると、人物像の提示という訳者の意図だけでなく、訳者自身が創作者なのか、それとも研究者なのかという属性が翻訳に反映される傾向がある。訳者自身が創作者の方がより自由で、時代を映した訳語を当てており、一方、研究者の訳では、少女は、ジェンダー・ステレオタイプ的な女ことばを話すことが多い。時代が変わっても、訳者の属性によって訳語に同じ傾向が見られる。一部、新しい試みが見られるものの、ジェンダーの視点からは、昭和時代でも平成時代でも研究者の会話文の訳語にはあまり変化が認められない。女学生ことばを話すアリスは、どの訳でも人物像が似通ってくる。それに対して、ジェンダーにとらわれない話し方をするアリスはそれぞれ個性的である。

登場人物の年齢について検討すると、原作ではアリスは7歳と言う設定だが、訳語の言葉遣いから想定される年齢は幅広い。なかには大人の様な言葉遣いのアリスもいる。明治時代の丸山訳では、愛ちゃん(Alice)の子どもらしい言葉遣いが特徴的だが、丹羽訳では綾子さん(Alice)もチェシャ猫も典

型的な女学生ことばを話す。大正時代は、子どもらしい言葉遣いと、丁寧な言葉遣いのアリスが描かれる。昭和時代になると、ですます調の大人のような言葉遣いの訳や、ジェンダーフリーの方向を目指す訳、現代の若者言葉を使う訳も登場する。しかし、21世紀に出版されたものでも、あえて7歳の子どものことばとは思えない古風な女ことばをアリスに語らせ、ヴィクトリア朝上層中産階級子女の雰囲気を漂わせるものもある。一方、女ことばとジェンダーフリーの言葉を併用する例もある。

以上の様に、翻訳の会話文には、人物像、ジェンダー意識、話し手との人間関係、訳者の属性と個性が自ずと表れる。人称詞や文末詞が英語よりも豊富な日本語の場合、どれを選択するかによって、創出されるキャラクター像、年齢、人物同士の関係、描かれる場の雰囲気が変わる。訳者による新たな訳語の選択が、新たな世界を作り上げていく。明治時代から平成時代にいたる約一世紀にわたる『不思議の国のアリス』翻訳の比較検討を行なったが、時代と翻訳者の個性を映し出し、今後も新しい翻訳作品が生み出されるだろう。

## [注]

- 1) Alice's Adventures in Wonderland 翻訳における漢字、平仮名、カタカナの活用については、拙論「菊池寛・芥川龍之介は『不思議の国のアリス』をどう訳したか――丸山英観訳、柳瀬尚紀訳との比較」(Otsuma Review 第53号、大妻女子大学英文学会、2020、10) で分析している。
- 2) 丸山英観は「 $\stackrel{*}{\text{Al}}$ 、丹羽五郎は  $\stackrel{*}{\text{Al}}$  と  $\stackrel{*}{\text{Al}}$  というルビをふっている。
- 3) 名前の後の数字は出版年を表す。以下同。
- 4) 丹羽訳には、第9、10章を削除するなど、原作から外れた部分がある。
- 5) 千森幹子は、丹羽訳では綾子 (Alice) の日本語を上品な明治の中上流階級の女の子の言葉遣いになおしていると述べている (216)。
- 6) 北村太郎 (1992)「解説」『ふしぎの国のアリス』。阿刀田高は本書の「鑑賞」の中で、「本書がいかにも現代の日本の女の子らしい言葉づかいと感性で訳されていることを私はとてもうれしく思った」と述べている。
- 7) 実際の訳文は改段しているが、スペースの都合上改段せずに表記する。

## [参考文献]

安西徹雄(1995)『英文翻訳術』ちくま学芸文庫.

尾野治彦(2018)『「視点」の違いから見る日英語の表現と文化の比較』開拓社.

楠本君恵(2001)『翻訳の国の「アリス」』未知谷、

千森幹子(2015)『表象のアリス』法政大学出版局.

中村桃子(2012)『女ことばと日本語』岩波新書.

(2013)『翻訳がつくる日本語』白澤社.

灰島かり(2005)『絵本翻訳教室へようこそ』研究社.

ベイカー, モナ他著, 藤濤文子監訳 (2009, 2013) 『翻訳研究のキーワード』研究社.

牧野成一(2018)『日本語を翻訳するということ』中公新書.

マンディ、ジェレミー著、鳥飼玖美子監訳(2008, 2018)『翻訳学入門』みすず書房、

## [引用作品]

CARROLL, Lewis. (1865, 1998) Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass. Penguin Classics.

石川澄子(1980)『不思議の国のアリス』東京図書。

岩崎民平(1929, 1972)『不思議の国のアリス』角川文庫。

大戸喜一郎 (1926)『不思議國めぐり』千森幹子編 (2009)『不思議の国のアリス〜明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集 4』エディション・シナプス(以下,本書は千森編と記す).

大西小生(2015)『ふしぎの国のアリス』ネガ!スタジオ.

河合祥一郎 (2010)『不思議の国のアリス』 角川文庫.

菊池寛, 芥川龍之介(1927)『アリス物語』興文社, 文藝春秋社.

北村太郎(1987, 1992)『ふしぎの国のアリス』集英社文庫。

楠山正雄(1920)『不思議の國』千森編『明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集2』.

芹生一(1979)『ふしぎの国のアリス』偕成社文庫.

高橋康也, 高橋迪 (1985, 2005)『不思議の国のアリス』新書館.

高山宏(2015)『不思議の国のアリス』亜紀書房.

多田幸蔵(1975)『不思議の国のアリス』旺文社文庫.

田中俊夫(1955)『ふしぎの国のアリス』岩波少年文庫.

丹羽五郎(1911)『長編お伽噺子供の夢』千森編『明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集1』.

福島正実(1975)『不思議の国のアリス』角川文庫.

丸山英観(1910)『愛ちゃんの夢物語』千森編『明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集1』.

村山由佳(2006)『不思議の国のアリス』メディアファクトリー.

益本青小鳥(1925)『繪入全譯 お轉婆アリスの夢』千森編『明治・大正・昭和初期邦訳本 復刻集3』.

望月幸三 (1923)『アリスの不思議國めぐり』千森編『明治・大正・昭和初期邦訳本復刻集 3』.

矢川澄子(1990, 1994)『不思議の国のアリス』新潮文庫。

安井泉(2017)『対訳・注解 不思議の国のアリス』研究社.

柳瀬尚紀(1987)『不思議の国のアリス』ちくま文庫.

山形浩生(2003)『不思議の国のアリス』朝日出版社.

#### 『不思議の国のアリス』の翻訳をジェンダーの視点から考察する(夏目 康子)

脇明子(2000)『不思議の国のアリス』岩波少年文庫.

鷲尾友治 (1925)『まりちやんの夢の國旅行 ふしぎなお庭』千森編『明治・大正・昭和初 期邦訳本復刻集 3 』.

(なつめ やすこ・大妻女子大学准教授)